

村野次郎創刊

香 蘭

二〇一九年(令和元年)十月一日発行(毎月一回一日発行)

香 蘭

第九十六卷第十号



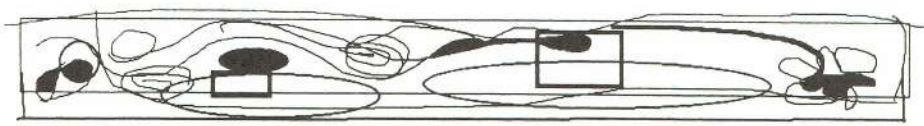
2019年(令和元年)10月号

西野美智代歌集『若苗色』批評特集

第 96 卷

第10号

通卷 1066 号



香 蘭

2019年(令和元年)10月号
西野美智代歌集『若苗色』批評特集
第96巻 第10号 通巻1066号

目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(50)			
	作品一特選	鈴木(桂)・伊藤(康)・岡	元子	表二
	作品二、三特選(八月号)	大井田・西野・宮原・朝香	石井・水本	
	近詠十五首 姥捨山	岩田・江口・中村(か)・松沢・三澤・河野・庄司	竹田・中村(陽)・馬場・藤本・柳沼・渡邊(典)	
	作品	内藤 美也子		
	一			
	二			
	三			
	推薦香蘭集			
	香蘭集			
	村野次郎への旅(115)	千々和 久幸	加藤 英彦	20 49
	転載「短歌月評」(毎日新聞7月23日付)	中村 陽子		31 22
	歌の生まれる場所(81)			
	西野美智代歌集『若苗色』批評特集			
	小林幸子(32)・五十嵐順子(34)・渡辺礼比子(36)			
	市川義和(38)・伊藤康子(39)			
	転載「短歌」8月号特集「戦中のうた」			
	「香蘭」			
	丸山三枝子			
	松沢みどり			
	小原裕光			
	松田恭子			
	渡辺礼比子			
	柏原義清			
	阿部容子			
	川原優子			
	岡野甫江			
	高田(み)・矢口(美)・俣本			
	香蘭集			
	作品二			
	作品三			
	緑地帯			
	明宝研究会第一〇九回七月例会			
	文法あれこれ(5)	能城 春美		
	七首抄(八月号)	村上・阿久津・田端		
	他誌拜見 107	大井田 啓子		
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向			
	歌会及び会合・会員消息・他			
	編集後記・新宿日記			
	表紙絵			
	中村 陽子「鏡を置けば」			
	目次・緑地帯カット			
	和田 和雄			
	88			
	表三			
	84 80 79 78 76 72 70 68 66 64 62 60 58 56 54 40			
	32 31 22 20 49 48 41 23 8 6 4 2			

村野次郎作品 私の愛誦歌 (50)

吹く風にふふめる雨をふりこぼし

重くゆらげるあぢさゐの花

岡 元子

アジサイの花をとりたてて好んでいたわけではない。強いていえば甘茶のような額アジサイ系の清楚な花が好みであった。いつの頃からか、紫陽花という漢字表記に心ひかれるようになり、次いでHydrangeaという英語に親しみを覚えるようになった。さらに学名がHydrangea macrophylla Seringe var. Otakusa Makinoということも知り、またアジサイを多数咲かせている神社、公園などを訪れることで、いつそうの親しみももてるようになってきたという経緯がある。

『樽風集』

昨年十一月号でもとりあげられた歌である。的確な評をされていたので改めて書き加えることもない。『樽風集』にある「あぢさゐの花」の連作を鑑賞していて表記の作品が心に残った。様々な角度からアジサイを詠んでいることも、なかなか多作ができない私には参考とすべきことであると思っている。

(短歌新聞社文庫『樽風集』76頁、「村野次郎三百首」28頁に所収)

四 選 者 の 作 品

扇 風 機

平 塚 千 々 和 久 幸

この人がどう言つたかは知らないが青木君もう許してやれよ
 行きずりに林檎三個を買い求め父の住みにし町をあとにす
 永遠の恋などはなし 人去りし部屋に扇風機が回り続けて
 ようように宴会の果てわが部屋に戻り草臥れし靴下を脱ぐ
 奥方はお達者ですかと声をかけレクチャー・ランチオンの会場に入る
 会場を出る時目礼したるのみ今日は言葉を交わさず帰る
 競輪場帰りのバスを降りて来る男のおおかたが猫背で歩く
 それぞれが介護の苦勞語るとき妻介護せるわれは黙せり

ベツトボトル 横 浜 渡 辺 礼比子

糠雨の止まぬゆうべを隣町の例大祭の花火鳴りいず
 くだびれて渡る日暮れの小橋よりベツトボトルの水を捨てたり
 ピロティを抜ける涼しき風のあり投票場なる子等の母校は
 鳶に飯を盗られしわれを羨めり自然愛好家の幸彦さんは
 うすべにの花タチアオイ列なれり火葬場までの道のかたえに
 ジェネリックにするかと聞かれ否という人ありどんな顔かと覗く

『枕詞辞典』コピーし配りたる熱意失せしか歌捨つるとう
 歌捨てし人がマラソンに励むとの噂聞こえ来 元氣ならよし

垂直の雨

鎌 倉 香 山 静 子

庭土に伏すごとと咲けるクチナシの白きを打てる垂直の雨
 うすべにの或は紫のあぢさゐを門々に咲かせる鎌倉の街
 もう花の終はれる高き木蓮の上をじーんじーんと夏の過ぎゆく
 蓮の葉を大きく揺らして過ぎゆける風の行方をわが目に追へり
 遠慮がちに鳴ける蟬の初鳴きを聞きつつ思ふ季の推移を
 故里を思へば聞こゆアカシアの林を過ぎる海よりの風
 尾崎豊の息子の唄ふ父の歌少しく似てゐる やつぱり違ふ
 ゴスペラーズの歌に酔ひつつひとときを三十一文字はちよつと休憩

ミンミンゼミ 我孫子 丸 山 三枝子

へブンリーブルーの鉢をペランダにふたつ並べて夏を迎える
 消防車の絵が代表になつたよと一年生からメールが届く
 玄関にひよいと置かれて麦藁帽子ほつりほつりと語りはじめつ
 初蟬の声降る下を行きながらミンミンゼミになりゆく我は
 夜を啼くミンミンゼミよ汝のまあ切なる声をわれは聞きたい
 大山駅ホームを歩くわたくしのふくらはぎを撫ですぎてゆく風
 死を語り合ひいるわれら誰も死を潜らねばふと口を閉ざせり
 語られて語り尽くされ西澤みつぎ真実故人になりてしまひぬ

作品一特選



(五選者共選)

くわんざう 西宮 鈴木桂子

スーパ一の朝青果のみづみづと切り分けられてメロン朱色にくわんざうの花ゆらゆらと住む人の少なくなりし社宅の庭に「おかあさん」とオカメイシンコに呼ばせぬる友の横顔少しさびしい街路樹の呼吸こもる夜を帰りゆく仕事を終へて心すがしく要するに何がいひたい娘の電話二時間過ぎてまだ続く夜銀色の七月の空雨ふふむ雲一面に在りて明るし

タピオカ 東京 伊藤康子

当たつたかな皆ザワザワとスマホ見るオリンピックのチケット抽選日オリンピック期間はきつと人員の不足なるらん働くほかなし梅雨寒の商店街に人群れるタピオカドリンクショップの開店

タピオカの行列横目におでん屋で大根選ぶ肌寒き梅雨

子の渡す土産は長岡花火バイ見に来られぬなら食べるがよろし

冷房の寒風直撃の席となり体調崩し友は辞めたり

決められし「アラスカ席」の席替えが御法度なればハラスメントぞ

梅雨真つ盛り 東京 坪裕

青桐は祈りの如く葉を垂らし雨に濡れつつ立っているなり

洗濯物を掻き分け部屋を歩き来する関東地方は梅雨真つ盛り

お日様が天の岩戸に隠れたかはだか踊りて出て来てほしい

酒呑めぬ君と串カツ食べている恋には遠き話しながら

園児等が窓から顔を出すように塀に列なる紫陽花清し

太陽に近づきたいと懸命に育つた向日葵を越えたり

人生ははかないものさ子や孫と夫を歌ってそれで終活

ネルドリップコーヒー 習志野 石井雅子

命終の香りはつよし一枝の折れたるバジルの葉をむしるとき

「相談と申請」の部屋は受付の前を通つて右奥のドア

木の枠の窓に鳶はふ喫茶店ネルドリップのコーヒーの泡

桑の実を食べて赤い舌見せし隣のケンちゃん教師になりしとぞ

新宿駅雨の土曜日十三時より山本太郎が演説するとふ

どの顔が誠実なのか嘘つきか朝のテレビの七党論戦

遠藤が勝ち石川遼が優勝し関係ないがうれしいテレビ

倉敷の風 倉敷 水本 美恵子

倉敷の風をまとへる美術館に睡蓮が咲くモノの睡蓮

体操を終へ足軽く帰るみち昼を色濃くへブンリーブルー

たくましく草伸びるなか昼顔の三、四輪が色あざやかに

チャイム鳴り中学生がどつと出づ立葵あかく咲きのほる傍

何も無い一日がすぎる何も無く生きるで何かとでもせはしく

同じこと何回も言ふ夫とゐてまた同じことこたへて二人

得度への五体投地の苦行せし積さんあなたの今が知りたい

道の風景 川崎 大井田 啓子

思ひきり降ればどの道止むだらうグラジオラスの直立の花

目じるしの教会いつかマンションとなり夏の雨音もなく降る

塀ぎはに立話する女らに黄のグラジオラスすこし傾く

追ひこしてゆきたる自転車少年はどこまで行きしや夕焼けを背に

形よく刈り込まれたる臍月にはヒルガホ二つばかあんとして

トランプさんが来ても去つても雨模様つばめが顔のすぐそばを飛ぶ

取り直しの末に負けたる大関の背が揺れながら花道を退く

多数決 東京 西野 美智代

キャンパスの献体慰霊式場へつづく並木のみどり滴る

蠟座の生れ憚りそれとなく星占ひの話題をかはす

半分のその半数の支持も得ず大きな顔をする多数決

待機室に七時間経し子の手術 時折立ちて体をほぐす

真夏日を来るんぢやないと子は怒り見舞つてやれと夫に怒らる

寝る前にひと休みすると言ふ夫よひと休みとは不思議な言葉

幾重もの縁につながる人集ひ『若苗色』読み湯葉を食みたり

いのちの息吹 倉敷 宮原 迪恵

萌えいずるものの気配はなまぐさし花も草木も生命の息吹は

入選通知一昨日は来ず昨日もこず柿の若葉がことに明るし

二階から見る街あかり赤き灯が雨の向こうにつぶやく如し

梅雨寒に春の日差しが恋しくてれんげの蜜を紅茶におとす

祖母おおばあが作りてくれし玉子酒つゆ寒の日の二人の秘密

桜餅は葉ごと食むべし八十歳の思い出のように鹹あまはゆき葉を

人生をかながえる時期は過ぎたりと新茶のみおり外は梅雨闇

伊豆の友 東京 朝香 ふさ枝

蛙二匹家に遊ばせ山畑へ友はみかんの摘果に行けり

玄関の「蛙に注意」の貼り紙は踏みつぶさない事にあるらし

健やかにあるを幸とし友は伊豆に晴耕雨読の日々を過ごせる

家々を天狗が廻る夏祭り巫女は隣家の十五歳なり

中学校の英語の教師メアリーさん浴衣姿で牛頭ごう天王祭

明日の天気雲に占う散歩みちの行き止まりは海苔に染まる

今は亡き恩師の家で女学生のわれがモデルの油絵に会う

作品二、三特選



(八月号作品から) 丸山 三枝子 選

〈作品二〉

紅濃き牡丹 安来 岩田明美

竹藪に風を聞きつつ土破る筈の気配足裏あうらにさぐる

ぼうたんの花を並べる松江駅新しき御代の改札口に

亡き妻の好みし花とぞ摘まれたる紅濃き牡丹は盥うに浮かぶ

高々とクレーンの揚げる棟の木の確と納まる青空のもと

・感覚で捉えても視覚で捉えても歌の核を外さない。

白き三日月 柏 江口 絹代

つけまつげ付けたるような目の猫が近ごろクロに会いに来て

平成の最後の雨が降りしきる中野サンプラザ前に立ち居る

さんざしの花くれないに落ちる雨 智紗代さんが逝ってしまつた

利根川に夕陽かたむき葬祭場の建屋に遠く白き三日月

結論を出したのだからバツシユを履く時よしと大きく声出し

・固有名詞にリアリティーが籠もり、軽みの詩情が心地良い。

選ぶ 福岡 中村 かよ子

町議選さえも選挙のプロのいて「流れ者感」漂わせおり
乗り過ごし見知らぬ駅に降り立ちぬ選ばなかつた人生のような
3Dプリンターで描く幸せの形のような一軒家建つ

・柔軟かつ説得力のある比喩で歌に奥行を醸す。

ゾンビ さいたま 松沢 みどり

残業をしても終わらぬ数件を残し平成の仕事を終える

次に会うのは令和だねと言いつて連休前の仕事を終える

泣きながら割り算を解く子を見つむ見守ることしかわれは出来ずに

十日間すっかり忘れていた仕事押し寄せてくる出勤前夜

明日にまずやらねばならぬあれこれが甦よみがえってくるゾンビのごとく

・勤めと母の日常を端的に詠み、ゾンビの比喩に迫力が漲る。

凶鑑に待む 横浜 三澤 幸子

かきつばたあやめしようぶの特徴をいまだ覚えず凶鑑に待む

元日は年どしあれど稀に会う元年待ちぬ和を願いつつ

押しよせるレイワレイワに草臥れた十連休を家に過すごして

国内外課題多くも自己責任忘れてならぬ食後の服薬

・とほけたように詠みつつ現代からも本質からも逸れない。

〈作品三〉

四角より丸 鎌倉 河野 慎二

帰るさの電車の窓にかかりたり姥捨山に愛づべき月は

封書だす他に用なき春昼のポストはやつぱり四角より丸
外套の背せなで聞きある寒の夜のかかはりのなき人の靴音

・軽みの口語体の増すなか、抒情性に富む世界を保つ。

春の雨ふる

横 浜 庄 司 健 造

あじさいに令和の雨のかたつむりあせらなくていいゆつくりがいい
苔むせるブロック塀の継ぎ目より姫女苑は今年も咲けり
せせらぎの音を聞きつつゆく路のネムの若芽にこぬか雨ふる
憂鬱の手にちぎりたる山椒の葉 僅かな時を匂いみちたり
・かたつむりや木草に心象を加味しバランスよく詠む。

よくぞここまで

大 分 竹 田 美 智 子

私から貴方へ送るものといえは五月の風と若葉の木々を
七十八歳めでたくもなき誕生日よくぞここまで生きてきたものだ
我の手の機能が一つ残りたりうたよむことを楽しみとして
・施設から自宅に戻った作者、難病と闘いつつ詠み続ける。

眠たくて

東 京 中 村 陽 子

人に会う予定なき日は眠たくてすべての細胞ゆるみていたり
夕暮を開いたままのチューリップ閉じる力はもうないらしい
パンジーの花がらを摘み甘い香に包まれながら春は眠たい
・身近な素材を、アンニュイの漂う雰囲気仕上げた。

しあわせは

松 江 馬 場 美 信

ほんとうは忘れてるのに相槌を打ってしまった同窓会で

どうせならメイク濃いめでイヤリングなんか挿らして古稀の少女は
老いたるも美人は美人それなりの我は品よく少し頷く

・デフォルメされた自画像に添むアイロニー。

震災のあとに

常陸太田 藤本 佐知子

ひた走る常磐道にたかだかと放射線量揭示されおり
檜葉にも大熊町にも人住まぬ家があります「フツウ」が遠い
富岡の畑に続く発電のパネルはひたに陽を吸うばかり
気仙沼の小高い丘に肩寄せて祈るがに建つ新築の家
塩竈に育てば一生使うから授業に教わるとう「竈」の文字
・3・11の連作、掬うべきを掬い読ませる。

枕 詞

足 利 柳 沼 きよ子

十連休どこか行かなきゃならないと強迫観念に駆られる日本
我が地区は十年先取りしています高齢化率40・52パーセント
枕詞「平成最後」使い終え 令和令和の狂騒曲が
・諧謔味に加え、言葉の幹旋に工夫が見える。

わたくしも風

鎌 倉 渡 邊 典 子

このビルにツバメ棲むとふ貼り紙をなでて過ぎむかわたくしも風
ありなしの不如意の色を灯しつつ白き薔薇さくその銘(美朝)
日面ひおもての垣根つづきにあふれ咲くむらさきつつし今を驕れよ
・何でもない素材を結句で立ち上がらせる。

姥 捨 山

内藤美也子

姥捨の駅より見ゆる水張田の冠かむりき着山「田毎たごとの月」よ

信州の姥捨山の長樂寺に千曲の衆と歌会をしたり

姥捨に歌会をしたり昔なら六十越えれば皆捨てられる

信州の漬物うまし臼井さんの心尽くしのつけもの旨し

車窓よりニセアカシアの白き花が咲き続くを見る信州の地に

庄川のふもとに立てる菅沼のたつた九軒の集落を見る

五箇山の水張田にたくさんのおたまじやくしがちよろちよろ泳ぐ

五箇山の庄川をはさむ菅沼は加賀藩指定の流刑地なりき

金沢の治部じぶに煮料理に舌つづみ旅の記念に加賀料理食む

金沢の近江市場で昼食にのど黒の刺身定食を食ぶ

金沢の近江市場食堂に安倍晋三の色紙を見たり

ひと言随想
楽しむのが一番

母恋ひの泉鏡花は茶屋街の暗がり坂を行つたりきたり

越中に五年間ゐし家持は有磯の海を眺めただらう

高岡は鑄物の街なれば前田利長はいものの大仏を造らせたり

三日会はぬと恋ひしくなるわが犬よ寝る前にもわが犬を思ふ

五月半ばに長野の千曲・筑北支部の歌会に参加させていただいた。日帰りで行って便利である。新緑が実に綺麗で、お蕎麦がおいしく、何より沢山の漬物のもてなしが嬉しかった。

五月下旬には岐阜、金沢へ二泊三日のバス旅行に行った。金沢は食べもののおいしく楽しかった。岐阜の菅沼・相倉集落は日本の原風景ともいえるところである。相倉集落の塩

硝作り(火柴―よもぎの葉や蚕の糞などで作る)など知らないことばかりであった。

夫の七回忌がすぎ、悲しみもやや淡くなつた。旅行に行つたり、犬と遊んだり、楽しく暮らしている。

短歌も未熟ながら楽しんでる。平らな気持ちで楽しく暮らしている。

短歌の出来はともかくも、楽しむのが一番だと思つている。

村野次郎への旅（115）

「ザムボア」と次郎（八）

千々和久幸

「村野次郎への旅」（108）で書いた通り、「香蘭」編集部書棚に「地上巡禮」は第四号までしか保存されていない。そこで今回からは同じ書棚にある「ザムボア」を読むことにする。「地上巡禮」から「ザムボア」復刊号までの間、白秋の歌誌がどういう変遷を辿ったのかは、「香蘭」内部はもとより外部の資料でも実はよく解らない。それほどに白秋の歌誌は離合集散が激しく、最終的には後述する白秋自身の手記を俟つ他にない。

六冊で終刊とし、「ARRS」に同行者の作品を発表させるが、自らは直接これに携ることなく、大正五年「紫烟草舎」を結び、雑誌「烟草の花」を創刊するがこれまた二号で終刊となる。また門下生に「曼陀羅」を刊行させるが、これも永続しなかった。

取り敢えず手元にある資料から、その手掛かりになる部分を見ておこう。

このことは白秋に集団結集力が欠けていたためか、そのようなことをよしとしなかったためか、どちらにしてもその結果、後述の大正期アララギに主流の座を許すこととなったという見方もなりたつのではなからうか。

（大正前期の歌壇「北原白秋の変貌」、加藤克巳『現代短歌史』）

また、白秋はいつの時も集団の先頭をはしるが、自ら雑誌を創刊・運営することに心がうすかったのか、大正期へ入ってから、大正二年巡礼詩社を結び翌三年九月に「地上巡礼」を創刊するが、四年三月にははや通巻

次いで来嶋靖生『大正歌壇史私稿』から、関連個所を抜く。

北原白秋は二月に小笠原父島に渡った。が、

俊子は鳥での暮らしに耐えられず帰京、白秋は遅れて帰り、七月に麻布十番に住む。俊子と離婚するが、この頃貧窮に苦しむ。しかし九月には「地上巡礼」を創刊する。十二月、『白金之独楽』刊。（大正三年、1914）

「ARRS」六月号二十首（与謝野晶子作品）の中から抄出した。掲載された「ARRS」はこの年四月、北原白秋が弟鉄雄とともに新しい意気込みをもって創刊した雑誌。

北原白秋は前述のように四月から弟鉄雄と阿蘭陀書房を創立、「ARRS」を創刊した。（同）

北原白秋は五月に江口章子と結婚。葛飾真間に住む。土地の人の交流を詠んだ歌なども見えるが、生活はかなり苦しく、後に刊行した『雀の卵』（大10・8）の「葛飾閑吟集」では「序にかへて」という文章で「赤貧常に洗ふが如く、いたゞくはありふれし米の飯、添ふるに一汁一菜の風韻、さながら古人の趣に相かなふを悦ぶ」云々と葛飾での生活を記している。

（大正五年、1916）

切れ切れの記録ではあるが、「地上巡禮」か

ら「ARS」「烟草の花」「曼陀羅」「ザムボア」と白秋が熱情とエネルギーの赴くままに手を替え品を替え歌誌づくりに奔走したことが解る。加うるに女性問題、さらに生活苦の中でのたうち回り、「文学を生活」にしていたことが解る。

そんな中で「ザムボア」第四巻第一號（復活號）は、1918（大正7）年1月13日に發刊された。表紙には「ザムボア」の下に朱で「朱樂」と記され、復活號と明記されている。つまりこの號以降がいわゆる後期「ザムボア」時代、ということになる。

まず目を引くのは、目次の次に「香蘭」人なら誰もご承知の白秋の文章がくる。

「大正七年一月一日。北原白秋謹んで河野慎吾、村野次郎両君の爲めあらゆる責任と愛とを以て茲に之の推讃の辭をおくる」で始まる「推讃の辭」が賑々しく掲載されていることである。

総頁60、ただし保存されている原本は60頁までで以降は落丁、つまり欠落している。社内雑報や後記、奥付はない。念のため代わりに二月號の奥付を写しておく。

— 21 —
東京市京橋區築地二ノ一、編輯兼發行者北

原章子、發行所 紫烟草舎、定價一部貳拾五錢、というのがそれ。

さて内容を見る前に、白秋がこれまでに雑誌の發刊とどう関わってきたかを記した一文がこの号に掲載されているので、関連箇所を読んでおこう。

朱樂から朱樂へ

北原白秋

「朱樂から朱樂へ」という題で朱樂以來の諸同人の動靜を系統的に書いてくれとの事であるので、簡単に記して後日の参考に供して置く。

明治四十一年十一月『朱樂』發刊。『朱樂』

は書肆東雲堂の發行するものであつたが、事實は全く私自身の純文藝雜誌であつた。凡てが私の色調を極度まで驕り盡した雜誌であつた。凡てが匂高く凡てがなつかしく凡てが清新でそれに飽迄華奢であつた。自分ながらあの位藝術的でなつかしみのあつた雜誌はあの頃も今時も無いと思へる。その『朱樂』の外形にも内容にも幾度か變遷があつたが、むろん私自身の上にも華やかな事も悲しい事も随分と移つて行つたが、兎に角大正二年の五月迄續刊し、私が相洲の三崎へ移ると共に廢刊した。それで全部十九冊となるわけである。

（中略）

大正二年の十二月。相洲の三崎見桃寺に於いて巡禮詩社が創立された。これが私を集團生活の中心として立たしめた初めてである。

（中略）雑誌『地上巡禮』が發刊されたのは私が小笠原より帰來して以後、三年九月の一日であつた。その誌は四號までは終刊の頃の「朱樂」と同型の小形なものであつたが、四年の一月號より大型の紺紙金泥の頗る高華な装幀を以て世に出た。あれ位立派なのは一寸出せさうもない。（中略）

『地上巡禮』は四年三月に廢刊して次の雑誌『アルス』（同五月初號）に併合された。而も巡禮詩社は依然として盛んになるばかりであつた。（中略）

『アルス』が同年の十月限りで廢刊になると、機關雜誌を失つた私と遠方にある社中との間は一時消息が絶えて了つた。

五年の秋、葛飾小岩に於て、私は巡禮詩社を改めて紫烟草舎とし再びちりぢりになつた元の社中を集めて、雑誌『烟草の花』を出す事になつた。右は十一月と十二月とに二冊出したさきりてまた廢刊の憂目を見るやうになつた。（中略）